

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	高大接続とカリキュラム評価におけるCAN DOリストの活用に関する研究 (II)
Author(s)	野村, 幸代; 藤井, 拓哉
Citation	茨城大学全学教育機構論集. 大学教育研究(1): 113-130
Issue Date	2018-03
URL	http://hdl.handle.net/10109/13547
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

高大接続とカリキュラム評価における CAN DO リストの活用に関する研究 (II)

野村 幸代*・藤井 拓哉**

(2017年12月8日 受理)

A Study Concerning Applications of CAN-DO Lists Regarding Articulation of English Education and Curriculum Evaluation (II)

Sachiyo Nomura* and Takuya Fujii**

(Accepted December 8, 2017)

Abstract

To assure the quality of the Integrated English Program (IEP) at Ibaraki University, the study investigated the usefulness of the CAN-DO Lists regarding the articulation between high schools and universities in English education and curriculum evaluation. By analyzing the Listening and Speaking portions of the CAN-DO Lists answered by students enrolled in Pre-Level 3 and Level 3 classes on the first and last days of class, the usefulness of the CAN-DO Lists for evaluating the articulation between high schools and universities was proved. It also showed that the objectives of Pre-Level 3 and Level 3 classes were successfully achieved.

はじめに

「高大接続とカリキュラム評価における CAN DO リストの活用に関する研究 (I)」(野村・藤井 2017)では、茨城大学総合英語プログラムのプレレベル3とレベル3に関して、ReadingとWritingに焦点を当てて、CAN DO リストを使用した高大アーティキュレーション(高等学校と大学の教育内容の接続)とカリキュラム評価への活用を検討し、その有用性を提示した¹⁾。

高大アーティキュレーションに関しては、CAN DO リストの分析により、プレレベル3とレベル3を受講する学習者が高等学校までの英語教育において身につけてきた英語のレベルを具体的に把握することができた。Readingについては、プレレベル3においては、英文を読みながら英語でメ

* 茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1 ; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan).

** 茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1 ; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan).

モを取る機会を増やすこと、また英文のパラグラフ構造を丁寧に説明する必要があることが示された。レベル3においては、プレゼンテーションを行う際の準備として、英語でインターネットや書籍などを検索し、概要を理解したうえで必要な情報を得る練習が必要であるということが示された。Writingについては、プレレベル3の学習者は150語程度、レベル3の学習者は300語程度の英文を書くことに対して困難を感じており、段階的な指導が必要であることが示された。

カリキュラム評価に関しては、2つの観点から検討した。第1の観点は、現状の指導計画により、学習者に重点的に指導すべき項目が身に着的かというものである。第2の観点は、現状の指導計画により、指導計画に明記された学習到達目標がどの程度達成されたか、というものである。CAN DO リストの分析から、第1の観点に関しては、初回授業と最終授業の学習者の自己評価に大幅な改善がみられたことから、プレレベル3とレベル3の指導計画は効果的であると評価できた。また、第2の観点についても、指導計画、指導目標と学習者の自己評価を照らし合わせた結果、プレレベル3とレベル3の指導計画は、学習者が学習到達目標を達成するために適したものであると評価できた。加えて、教師が最終授業のCAN DO リストの結果を基に自身の実践を振り返ることにより、次のような指導の改善点も示唆された。プレレベル3に関しては、最後まで「できない」「全くできない」という回答比率が高かったReading4については、英語でメモを取りながら読むように指示はしたものの、実際に学習者がどのようなメモをどの程度取りながら読んでいるのかという点を確認せず、具体的にメモの取り方を説明したり訓練したりすることも行わなかった。今後はこれらを指導に取り入れていく必要がある。レベル3については、ReadingとWritingの項目において学習者の自己評価は概ね改善された一方、Reading1と3は若干であるが「できない」「全くできない」という回答比率が上がった。主な原因と考えられる、高度な英語への不慣れを解消するため、インターネットや書籍で使われる専門的かつ複雑な構造の英語を読む課題などを積極的に取り入れ、高度な英語を読む訓練を継続的に行って行く必要がある。

本稿では、野村・藤井(2017)では扱うことができなかったListeningとSpeakingに対し、同じ対象を同じ方法で分析することにより、以下の点を明らかにする。第1に、ListeningとSpeakingの高大アーティキュレーションの検討により、学習者に重点的に指導すべき項目を明示する。前稿でも述べたように、現在の大学入学システムには、(1)非学力選抜の普及、(2)学習者の学力低下、(3)各大学の個別試験の軽量化という特徴が見られ、大学入学者の学力が多様化している(荒井1998)。この現状を踏まえ、文部科学省は大学教育の質保証を強調するようになっている。中央教育審議会の「学士課程教育の構築に向けて(答申)」(2008年12月24日)は、教育の質保証の観点から、高等学校と大学の接続の在り方を見直し、客観的できめ細やかに学習者の学力を把握し、大学がそれに基づいて適切な指導を行うよう明言している。つまり、大学教育には、学習者が様々な学習経験を持つことを考慮にいれて、一人一人の学習者の学力を客観的に把握することが要請されているのである。本稿では、学習者のListeningとSpeakingに関して、高等学校までに身につけている英語のレベルを具体的に把握し、大学初年次で重点的に指導すべき項目を特定する。第2に、ListeningとSpeakingに関して、指導計画に示されている、学習者に重点的に指導すべき項目が身に着的なのか、また、指導計画に明記された学習到達目標がどの程度達成されたかを検討することにより、カリキュラム評価を行う。前稿でも述べたように、カリキュラムには2つの視点からの定義がある。第1の定義は、「大学が提供している授業科目の総体ないし教育課程の集合体」

であり、「一定の分野で学生を卒業させ、あるいは学生に資格を与えるに至るまでの、一連の組織化された授業科目及び指導のための素材」である(喜多村 1999)。この意味でのカリキュラムは、教育内容を配列した指導計画が含まれる。前出の答申でも、大学教育を実施するにあたって、指導計画としてのカリキュラムの編成や実施を点検し評価することが求められている。それでは、このカリキュラムをどのような視点から評価する必要があるのであろうか。それはカリキュラムの第2の定義による。カリキュラムの第2の定義によると、カリキュラムとは学習者の「教育経験の総体(佐藤 1996)」である。前出の答申では、学習成果とは「プログラムやコースなど、一定の学習期間終了時に、学習者が知り、理解し、行い、実演できることを明言したもの」と説明されており、それを評価することも求められている。ここから、プログラムや指導計画などの意味でのカリキュラムは、学習者の教育経験の総体(すなわち、第2の意味でのカリキュラム)という意味で評価する必要があることがわかる。それゆえ、教育改善を目指すカリキュラムを論じる際には、カリキュラムという用語が指導計画と「教育経験の総体」の二重の意味を有していることを踏まえなければ、一面的な議論にしかならぬ(野畑・赤堀 2002)。以上から、本稿ではカリキュラムという用語を、指導計画及び指導計画に基づく学習者の「教育経験の総体」と定義し、学習者がその指導計画に基づいた授業によって何を身に着けたのかという視点からカリキュラムを評価する。

本稿のリサーチ・クエスチョン (RQ) は次の2点である。

RQ 1: 総合英語プログラムプレレベル3とレベル3の学習者に対して、ListeningとSpeakingの分野で重点的に指導すべき項目は何か(CAN DO リストの高大アーティキュレーションへの活用の検討)。

RQ 2: 総合英語プログラムプレレベル3とレベル3のカリキュラムにより、ListeningとSpeakingの分野で重点的に指導すべき項目が学習者に身に着いているのか、また、指導計画に明記された学習到達目標はどの程度達成されたか(CAN DO リストのカリキュラム評価への活用の検討)。

方法

1. 対象

調査対象は、野村・藤井(2017)と同様、茨城大学総合英語プログラムプレレベル3とレベル3を受講する1年生である。入学者の大部分はこのいずれかのレベルを受講している。プレレベル3では3クラスの計80名を任意に選んだ。各クラスに約30名在籍しており、留学生と再履修者を除いた学習者を選んだ。80名のうち、39名(49%)が推薦入試による入学者である。プレレベル3には推薦入学者や、特色のある高等学校(総合高校や専門高校)出身者が混在しており、高大アーティキュレーション構造の複雑さを反映した授業環境である。レベル3は3クラスの計71名を任意に選んだ。各クラスに約30名在籍しており、留学生と再履修者を除いた学習者を選んだ。

CAN DO リストは、プレレベル3はCEFRのA2とB1レベル、レベル3はB1とB2レベルに基づいて作成されている(吉島・大橋 2004; 茨城大学大学教育研究開発センター英語科目専門部会 2006)。A2は基礎段階の言語使用者、B1とB2は自律した言語使用者の言語使用能力を示している。CEFRのレベルは大別して6段階あり、A2は下から2番目、B1は下から3番目、B2は

上から3番目である。CAN DO リストは、英語による具体的な活動の記述に対して「かなりできる」「できる」「どちらともいえない」「できない」「全くできない」という5段階のリッカートスケールに基づいて回答する形式になっている。データは2016年4月から7月に収集し、学習者には回答結果を教育改善と研究に使用する承諾を得た。

2. 分析方法

野村・藤井(2017)と同様、次のように分析を行った。CAN DO リストを高大アーティキュレーションに活用するために、初回授業(2016年4月)で学習者に記入させたCAN DO リストから、Listening と Speaking の項目ごとに「かなりできる」「できる」という回答比率と「できない」「全くできない」という回答比率を算出し、高等学校の英語教育を通して身につけていると思われる項目と、大学初年次英語教育において重点的に指導すべき項目とを抽出した。また、CAN DO リストをカリキュラム評価に活用するために、最終授業(2016年7月)で学習者に記入させたCAN DO リストの回答結果を初回授業の回答結果と比較することにより、学習者の自己評価が著しく改善した項目と、変化に乏しい項目を明らかにした。カリキュラム評価は次の2つの観点から行った。第1に、大学初年次英語教育において重点的に指導すべき項目に対して、授業を通じて学習者の自己評価がどのように変化したか、第2に、プレレベル3及びレベル3の学習到達目標として設定されている技能に対して、学習者の自己評価がどのように変化したかという点である。表1にプレレベル3とレベル3の指導計画に明記された学習到達目標、表2にプレレベル3の、表3にレベル3のCAN DO リストのListening と Speaking の項目と具体的記述を示した。

表1 プレレベル3とレベル3の学習到達目標

	Listening	Speaking
プレレベル3	日常生活の身近な話題や活動、例えば基本的な個人や家族の情報、生活環境、教育的背景、好きなもの、アルバイトや将来の仕事などについて、簡単ではっきりとしたものなら、話されている内容の大意が理解できるようになること、また身近な話題について学習者が行う2分程度の発表の大意が理解できるようになることを目標とします。	日常生活の身近な話題や活動について、ごく短い社交的なやり取りも含め、コミュニケーションが取れること、アイコンタクトをとり、適切な声の大きさではっきりと話して、2分程度のインフォーマルな発表ができるようになること、また学習者が行う発表の内容に関して、簡単な言い方で質問をしたり答えたりすることができることを目標とします。
レベル3	1. understand general ideas expressed in clear standard speech (はっきりした標準的な話であればその大意がわかる) 2. write down keywords or take notes while listening to CDs,	1. carry on a 2-minute conversation about topics he/she is interested in (大学生活や趣味などの日常的な活動に関する話題について、2分程度の会話を続けることができる) 2. ask questions and express

	<p>speeches or oral presentations (CD、スピーチ、プレゼンテーションの話の概要を表すキーワードやメモを取ることができる)</p> <p>3. understand the teacher's instructions (授業中の教師の指示を理解することができる)</p>	<p>his/her opinions in simple English and interact with the teacher or classmates in a simple way while performing classroom activities (課題において、教員や学生者に簡単な英語を用いて内容確認の質問をしたり、感想や自分の意見を述べたりすることができる)</p> <p>3. make speeches or a 3-minute oral presentation on topics he/she is interested in, using his/her knowledge of vocabulary and grammar (自分の興味・関心にあわせた話題を選んで、知っている単語や文法知識を使って 3 分程度のプレゼンテーションができる)</p> <p>4. pay attention to the audience and put stress on important words and phrases when making an oral presentation; use the appropriate speed, rhythm and intonation (聞き手を意識して、大切な部分を強調して話すことができ、かつアピールできる速度、リズム、イントネーションでプレゼンテーションができる)</p>
--	---	---

表 2 プレレベル 3 の CAN DO リスト (Listening と Speaking の項目と具体的記述)

技能	項目	具体的記述
聴くこと	Listening 1 (L 1)	日常生活に関連する話題 (例えば、基本的な個人や家族の情報、生活環境、教育的背景、好きなもの、旅行、アルバイト、将来の仕事など) について、簡単ではっきりしたものなら、話されている内容の大意がわかる
	Listening 2 (L 2)	日常生活に関連する話題についての話を聞き、目的に合わせて、必要最低限のメモが英語で取れる
	Listening 3 (L 3)	日常生活に関連する話題についての 2 分程度の発表 (スピーチ、プレゼンテーション) を聞き、大意がわかる

話すこと	Spoken Interaction 1 (SI 1)	日常生活に関連する話題について、ごく短い社交的なやりとりができる
	Spoken Interaction 2 (SI 2)	日常生活に関連する話題について、決まりきった簡単な課題（例えば、教室で学習者同士で話し合うなど）においてコミュニケーションがとれる
	Spoken Interaction 3 (SI 3)	日常生活に関連する話題についての発表において、簡単な言い方で質問したり、それに答えたりすることができる
	Spoken Production 1 (SP 1)	日常生活に関連する話題について、簡単な言葉を使用し、連続した句や文で話すことができる
	Spoken Production 2 (SP 2)	日常生活に関連する話題について、2分以上のインフォーマルな発表をすることができる
	Spoken Production 3 (SP 3)	発表する際、聞き手とアイコンタクトをとりながら話すことができる
	Spoken Production 4 (SP 4)	発表する際、それにふさわしい声の大きさを話することができる
	Spoken Production 5 (SP 5)	発表する際、はっきりと話することができる

表3 レベル3のCAN DO リスト (Listening と Speaking の項目と具体的記述)

技能	項目	具体的記述
聴くこと	Listening 1 (L 1)	文化や環境などに関する馴染みのある話題や、大学生活、趣味などの日常的な活動に関する情報について、標準的な英語ではっきりと話されたものなら、内容の大意を理解することができる
	Listening 2 (L 2)	文化や環境などに関する馴染みのある話題や、大学生活、趣味などの日常的な活動に関する情報について3分程度のプレゼンテーションを聞き、大意を理解することができる
	Listening 3 (L 3)	文化や環境などに関する馴染みのある話題や、大学生活、趣味などの日常的な活動に関する情報についてのプレゼンテーションを聞き、話の概要を表すキーワードを書き留め、質問のためのメモを取ることができる

	Listening 4 (L 4)	はっきりと話されたものであれば、授業中の教師の指示を理解することができる
話すこと	Spoken Interaction 1 (SI 1)	大学生活や趣味などの日常的な活動に関する話題について、学習した表現を活用しながら2分程度の会話を続けることができる
	Spoken Interaction 2 (SI 2)	大学生活や趣味などの日常的な活動に関する話題についての会話の内容をまとめて、紹介することができる
	Spoken Interaction 3 (SI 3)	文化や環境などに関する馴染みのある話題や、大学生活、趣味などの日常的な活動に関する3分程度のプレゼンテーションを聞いて、簡単な英語を用いて内容確認の質問をしたり、感想や自分の意見を述べたりすることができる
	Spoken Interaction 4 (SI 4)	学習内容に関して、教師と簡単な英語でのやり取りができる
	Spoken Production 1 (SP 1)	文化や環境などに関する馴染みのある話題や、大学生活、趣味などの日常的な活動に関する話題から、自分の興味・関心にあわせた話題を選んで、3分程度のプレゼンテーションができる
	Spoken Production 2 (SP 2)	文化や環境などに関する馴染みのある話題や、大学生活、趣味などの日常的な活動に関する話題について、知っている単語や文法知識を使って話すことができる
	Spoken Production 3 (SP 3)	聞き手を意識して、大切な部分を強調して話すことができる
	Spoken Production 4 (SP 4)	聞き手にアピールできる速度、リズム、イントネーションでプレゼンテーションができる

結果

1. プレレベル 3

図 1 は、初回授業において CAN DO リストの Listening と Speaking の各項目に対して、学習者が「できない」「全くできない」と回答した比率 (%) と「かなりできる」「できる」回答した比率 (%) をグラフ化したものである。黒いグラフが「できない」「全くできない」、白いグラフが「かなりできる」「できる」と回答した比率を表している。グラフの L は Listening、SI は Spoken Interaction、SP は Spoken Production を意味し、表 2、3 の項目の略語を指す。例えば、L 1 は Listening の項目 1 を指し、その具体的記述に対する回答比率を表す。

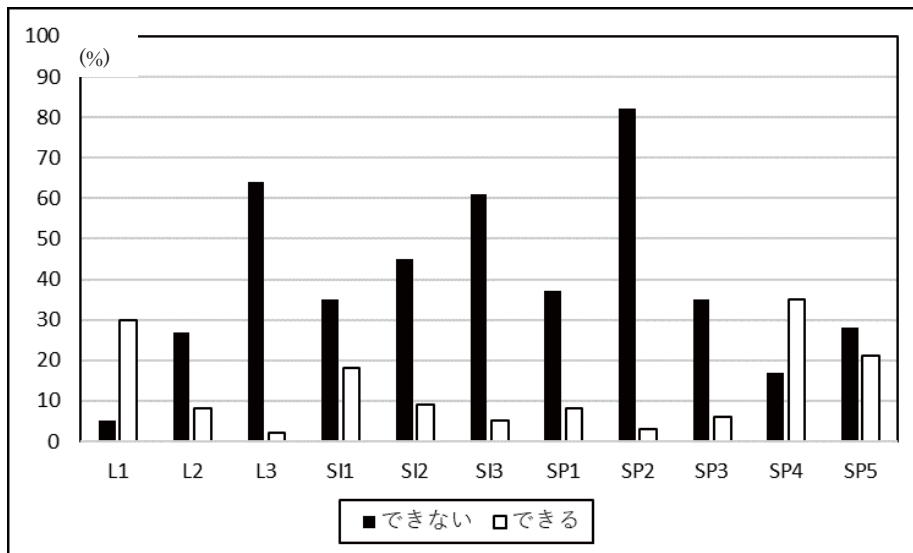


図1 プレレベル3学習者の初回授業におけるCAN DOリストの回答比率

「できない」「全くできない」という回答が過半数を超えた項目は、高い順に Spoken Production 2 (82%)、Listening 3 (64%)、Spoken Interaction 3 (61%) であった。一方、「かなりできる」「できる」という回答が過半数を超えたものは1つもなかった。ここから、全ての項目に対して丁寧な指導が必要であるが、特に、Spoken Production 2、Listening 3と Spoken Interaction 3 が、大学初年次に重点的に指導すべき項目であることが示された。

図2は、初回授業と最終授業において実施したCAN DOリストの「できない」「全くできない」という回答比率(%)を比較したものである。黒いグラフが初回授業において「できない」「全くできない」、白いグラフが最終授業において「できない」「全くできない」と回答した比率を表している。

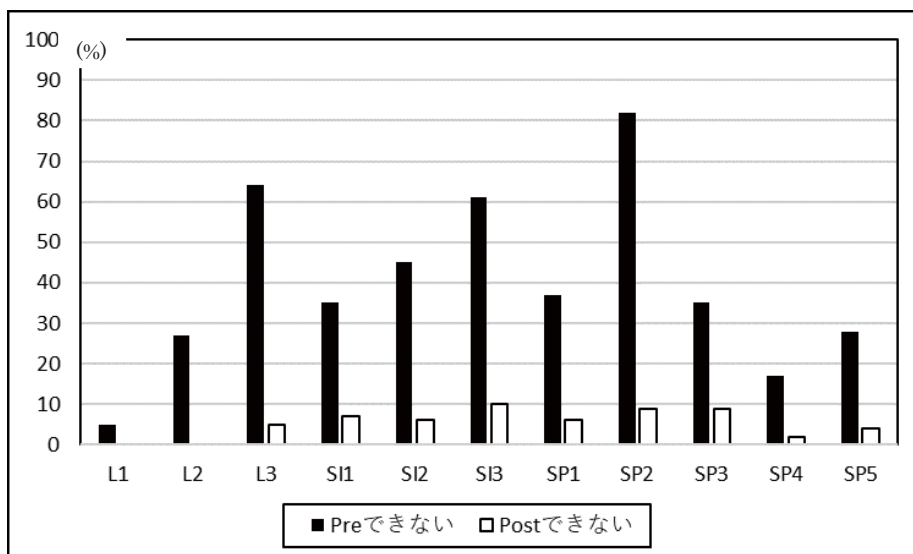


図2 プレレベル3学習者の初回授業と最終授業のCAN DOリストの「できない」「全くできない」という回答比率

全ての項目において、学習者の自己評価は大幅に改善された。初回授業において「できない」「全くできない」という回答比率が高かった Spoken Production 2 は 82% から 9% に、Listening 3 は 64% から 5% に、Spoken Interaction 3 は 61% から 10% になった。しかしながら、最終授業において「できない」「全くできない」という回答が、Spoken Interaction 3 では 10%、Spoken Production 2 と Spoken Production 3 では 9% 見られ、指導改善の余地があることが示唆された。

2. レベル 3

図 3 は、初回授業において CAN DO リストの Listening と Speaking の各項目に対して、学習者が「できない」「全くできない」と回答した比率 (%) と「かなりできる」「できる」と回答した比率 (%) をグラフ化したものである。黒いグラフが「できない」「全くできない」、白いグラフが「かなりできる」「できる」と回答した比率を表している。グラフの L は Listening、SI は Spoken Interaction、SP は Spoken Production を意味し、表 2、3 の項目の略語を指す。例えば、L 1 は Listening の項目 1 を指し、その具体的記述に対する回答比率を表す。

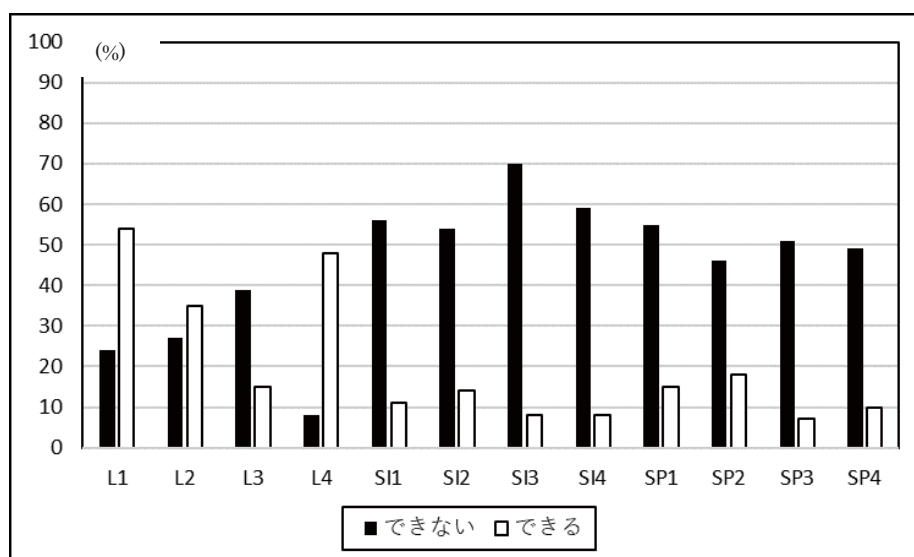


図 3 レベル 3 学習者の初回授業における CAN DO リストの回答比率

「できない」「全くできない」という回答が過半数を超えた項目は、高い順に Spoken Interaction 3 (70%)、Spoken Interaction 4 (59%)、Spoken Interaction 1 (56%)、Spoken Interaction 2 (54%)、Spoken Production 3 (51%) であった。一方、「かなりできる」「できる」という回答が過半数を超えたものは Listening 1 (54%) のみであった。ここから、全ての項目に対して丁寧な指導が必要であるが、特に Spoken Interaction と Spoken Production が、大学初年次に重点的に指導すべき項目であることが示された。

図 4 は、初回授業と最終授業において実施した CAN DO リストの「できない」「全くできない」という回答比率 (%) を比較したものである。黒いグラフが初回授業において「できない」「全くできない」、白いグラフが最終授業において「できない」「全くできない」と回答した比率を表している。

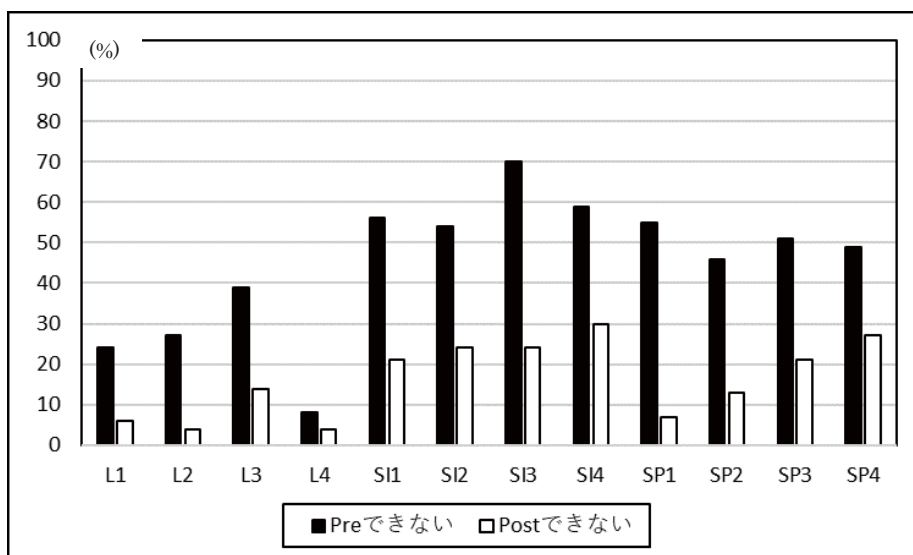


図4 レベル3学習者の初回授業と最終授業のCAN DOリストの「できない」「全くできない」という回答比率

全ての項目において、学習者の自己評価は大幅に改善された。初回授業において「できない」「全くできない」という回答比率が高かった Spoken Interaction 3 は 70%から 25%に、Spoken Interaction 4 は 59%から 30%に、Spoken Interaction 1 は 56%から 21%に、Spoken Interaction 2 は 54%から 24%に、Spoken Production 3 は 51%から 21%になった。しかしながら、最終授業において Spoken Interaction と Spoken Production に関しては、「できない」「全くできない」という回答比率が 20%を超える項目も見られ、指導改善の余地があることが示唆された。

考察

RQ1: 総合英語プログラムプレレベル3とレベル3の学習者に対して、ListeningとSpeakingの分野で重点的に指導すべき項目は何か。

高等学校学習指導要領によると、外国語科目は「コミュニケーション英語I」が必修である。大学入学者の英語の学習経験は様々ではあっても、「コミュニケーション英語I」はほぼ全ての学習者が履修していると考えられる。その目標は「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養う。」と設定されている。高等学校学習指導要領からは、高等学校卒業時点で学習者が身に着けるべき英語力の基準を掴むことはできるが、実際に大学入学時点でこの目標がどの程度達成されているのかという点は明確には把握できない。しかしながら、CAN DOリストの分析により、プレレベル3とレベル3を受講する学習者が高等学校までの英語教育において身に付けてきた英語力のレベルを具体的に把握することができた。例えば、「コミュニケーション英語I」のListeningの指導内容は「事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする」というものであるが、高等学校学習指導要領とCAN DOリストの分析結果とを照合することにより、プレレベル3の学習者は、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をと

らえたりすることはできるが、2分程度と長くなると大意がつかみにくくなることが示され、2分程度の英語を聞けるようになる指導が必要であることが示された。またレベル3の学習者は、文化や環境などに関する馴染みのある話題や、日常的な活動に関する情報について理解したり、キーワードを書き留めたりする指導が必要であることが示された。

「コミュニケーション英語 I」の **Speaking** の指導内容は「聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて話し合ったり意見の交換をしたりする」というものである。ここから、高等学校の英語の授業では聴衆の前で口頭発表を行う機会が少ないことが推察される。そのため、プレレベル3のCAN DO リストの **Spoken Production 2** の「日常生活に関連する話題について、2分以上のインフォーマルな発表をすることができる」という項目や、レベル3の **Spoken Production 1** の「文化や環境などに関する馴染みのある話題や、大学生活、趣味などの日常的な活動に関する話題から、自分の興味・関心にあわせた話題を選んで、3分程度のプレゼンテーションができる」、**Spoken Production 4** の「聞き手にアピールできる速度、リズム、イントネーションでプレゼンテーションができる」という項目に関して、「できない」「全くできない」という回答比率が高くなることは想定できる。しかしながら、プレレベル3の **Spoken Interaction 3** の「日常生活に関連する話題についての発表において、簡単な言い方で質問したり、それに答えたりすることができる」という項目や、レベル3の **Spoken Interaction** 全般に対して「できない」「全くできない」という回答比率が高いことは、高等学校学習指導要領に記載されている **Speaking** に関する指導内容が十分に身に着いていないことを示している。

本分析により、プレレベル3とレベル3の学習者に対して **Listening** と **Speaking** の分野で重点的に指導すべき項目は何かという点が明らかになった。これらには、高等学校学習指導要領からは推察できない点も含まれており、CAN DO リストの回答を分析することは「教育の質保証の観点から、高等学校と大学の接続の在り方を見直し、客観的できめ細やかに学習者の学力を把握」という「学士課程教育の構築に向けて（答申）」の要請に応じるものとなる。以上から、CAN DO リストは **Listening** と **Speaking** の領域においても、英語教育の高大アーティキュレーションにとって有用な道具となることが示された。

RQ 2： 総合英語プログラムプレレベル3とレベル3のカリキュラムにより、**Listening** と **Speaking** の分野で重点的に指導すべき項目が学習者に身に着いたか、また、指導計画に明記された学習到達目標はどの程度達成されたか。

1. プレレベル3

図1が示す通り、**Listening** と **Speaking** の分野で重点的に指導すべき項目は、**Spoken Production 2**、**Listening 3**、**Spoken Interaction 3**であった。図2が示すとおり、学習者の「できない」「全くできない」という回答は、**Spoken Production 2** は82%から9%に、**Listening 3** は64%から5%に、**Spoken Interaction 3** は61%から10%になり、大幅に改善された。この結果を踏まえ、指導計画を評価する。

まず、プレレベル3のカリキュラムにより、**Listening** と **Speaking** の分野で重点的に指導すべき項目が学習者に身に着いたか、という点を検討する。**Listening** の重点的指導項目は、**Listening 3** の「日常生活に関連する話題についての2分程度の発表（スピーチ、プレゼンテーション）を聞

き、大意がわかる」であり、指導計画に基づいて、第5回、第11回、第18回、第26回の授業において、学習者によるスピーチとプレゼンテーションが実施された。その際に、聴衆となる学習者は英語でメモを取るように指示された。また、使用テキストにはリスニング問題が設定されており、英語でメモを取りながら聞く教材になっている。さらに自律的学習として、教科書付属のDVDや教科書掲載の英会話の音声をダウンロードして聞くという課題が設定されている。これらは、Listeningの重点的指導項目に対して、効果的であったと評価できる。

Speakingの重点的指導項目は、Spoken Production 2の「日常生活に関連する話題について、2分以上のインフォーマルな発表をすることができる」と、Spoken Interaction 3の「日常生活に関連する話題についての発表において、簡単な言い方で質問したり、それに答えたりすることができる」というものであった。大学入学時点において、ほとんどの学習者が英語による口頭発表の経験がないと推察されるため、プレレベル3ではスピーチが行えるよう段階的に指導している。最初のスピーチは自分の子供時代の思い出について1分以内、2回目は自分が調べた外国のアパートについて1分程度、3回目は料理の作り方について1分30秒程度で行うよう計画されている。最後は旅行計画について2分程度のプレゼンテーションが実施された。このように、徐々に話す時間を伸ばしているため、学習者は最終的に2分以上のプレゼンテーションが行えるようになった。また、この4回のスピーチやプレゼンテーションには、聴衆が発表者に英語で質問し、発表者が答えるというアクティビティが含まれている。これらの指導を通して、Speakingの重点的指導項目に対する学習者の自己評価が著しく改善されたことから、この指導計画は効果的であったと評価できる。以上から、プレレベル3のカリキュラムは、ListeningとSpeakingの分野で重点的に指導すべき事項が学習者に身についたかという観点から判断すると、効果的であったと評価できる。

次に、指導計画に明記された学習到達目標はどの程度達成されたか、という点を検討する。Listeningの学習到達目標は表1に示した通り、「日常生活の身近な話題や活動、例えば基本的な個人や家族の情報、生活環境、教育的背景、好きなもの、アルバイトや将来の仕事などについて、簡単ではっきりとしたものなら、話されている内容の大意が理解できるようになること、また身近な話題について学習者が行う2分程度の発表の大意が理解できるようになること」と設定されている。この学習到達目標に向けたCAN DOリストの「できない」「全くできない」という回答比率は、Listening 1に関しては初回授業においては5%であり、多くの学習者が高等学校までの学習によって身につけている力であることがわかる。最終授業の回答比率は0%であった。Listening 2に関しては、初回授業においては27%であったが、最終授業では0%であった。Listening 3に関しては64%から5%に低下した。以上から、プレレベル3のListeningに関する指導計画は、学習到達目標を達成するために適したものであったと評価できる。

Speakingの学習到達目標は表1に示した通り、「日常生活の身近な話題や活動について、ごく短い社会的なやり取りも含め、コミュニケーションが取れること、アイコンタクトをとり、適切な声の大きさではっきりと話して、2分程度のインフォーマルな発表ができるようになること、また学習者が行う発表の内容に関して、簡単な言い方で質問をしたり答えたりすることができること」と設定されている。この学習到達目標に向けたCAN DOリストの記述はSpoken InteractionとSpoken Productionに分類されている。Spoken Interactionに関しては、Spoken Interaction 1の初回授業の「できない」「全くできない」という回答比率は35%であり、Spoken Interaction 2は

45%であった。プレレベル3ではグループワークやペアワークを多く取り入れ、学習者同士が英語でコミュニケーションをとる機会を多く設定している。その積み重ねにより、最終授業では Spoken Interaction 1 の回答比率は 7%、Spoken Interaction 2 に関しては 6%まで低下した。Spoken Interaction 3 に関しては、既述したように 61%から 10%に低下した。

Spoken Production に関しては、Spoken Production 1 の初回授業の「できない」「全くできない」という回答比率は 37%であった。これも上述したグループワークやペアワークの積み重ねにより、最終授業では 6%まで低下した。Spoken Production 2 に関しては、既述したように 82%から 9%まで低下した。Spoken Production 3 から 5 は、英語で発表する際の話し方に関するものであり、初回授業の「できない」「全くできない」という回答比率は、それぞれ 35%、17%、28%であった。指導計画には 3 回のスピーチと 1 回のプレゼンテーションが組み込まれており、その際に学習者同士による評価が実施されている。その評価項目には Volume of voice (声の大きさ)、Clarity of speech (スピーチの明確さ)、Eye contact (アイコンタクト) が設定されている。学習者はこの 3 点を意識しながら 4 回の発表を行った結果、最終授業の回答比率はそれぞれ 9%、2%、4%に低下した。以上から、プレレベル3の Speaking に関する指導計画は、学習到達目標を達成するために適したものであったと評価できる。

しかしながら、最後まで「できない」「全くできない」という回答比率が高かったものは、Spoken Interaction 3 (10%)、Spoken Production 2 (9%)と Spoken Production 3 (9%)であった。Spoken Interaction 3 に関しては、学習者による 4 回のスピーチやプレゼンテーションにおいて英語による質疑応答が行われたが、一人あたりの回数としては、授業時間の制約があり十分な機会を提供することができなかった。今後は、ブックレポートの内容などをグループで発表させ、それに基づく英語による質疑応答を取り入れるなど、学習者による英語の質疑応答の機会を増やしていくことが求められる。Spoken Production 2 と Spoken Production 3 にも課題が見られることから、何割かの学習者は 2 分程度の口頭発表はできてはいるものの、自信を持って行うというレベルには達していないことが推察される。スピーチ練習の機会を増やしたり、具体的に褒めたりすることが有効であるかもしれない。

2. レベル3

図 3 が示す通り、Listening と Speaking の分野で重点的に指導すべき項目は Listening 3、Spoken Interaction 全般と Spoken Production 全般であった。図 4 が示すとおり、学習者の「できない」「全くできない」という回答は、Listening 3 は 39%から 14%に改善された。また、Spoken Interaction 1 は 56%から 21%に、Spoken Interaction 2 は 54%から 24%に、Spoken Interaction 3 は 70%から 25%に、Spoken Interaction 4 は 59%から 30%に、Spoken Production 1 は 55%から 7%に、Spoken Production 2 は 46%から 13%に、Spoken Production 3 は 51%から 21%に、Spoken Production 4 は 49%から 27%に大幅に改善された。この結果を踏まえ、指導計画を評価する。

まず、レベル3のカリキュラムにより、Listening と Speaking の分野で重点的に指導すべき項目が学習者に身に着いたか、という点を検討する。Listening の重点的指導項目は、Listening 3 の「文化や環境などに関する馴染みのある話題や、大学生活、趣味などの日常的な活動に関する情報

についてのプレゼンテーションを聞き、話の概要を表すキーワードを書き留め、質問のためのメモを取ることができる」というものであった。指導計画に基づいて、第7回、第14回、第15回、第28回、第29回、第30回の授業において、学習者によるスピーチ1回とプレゼンテーションが2回実施された。その際に、聴衆となる学習者は英語でメモを取るよう指示された。また、使用テキストにはリスニング問題が設定されており、英語でメモを取りながら聞く教材になっている。さらに自律的学習として、教科書付属のDVDや教科書掲載の英会話の音声ダウンロードして聞くという課題が設定されている。これらは、Listeningの重点的指導項目に対して、効果的であったと評価できる。しかしながら、Listening 3は改善されたとはいえ、最終授業での回答比率が14%と依然として高いため、改善の余地がある。

Speakingの重点的指導項目はSpoken Interactionの1から4とSpoken Productionの1から4であった。Spoken Interactionの重点的指導項目は、Spoken Interaction 1の「大学生活や趣味などの日常的な活動に関する話題について、学習した表現を活用しながら2分程度の会話を続けることができる」、Spoken Interaction 2の「大学生活や趣味などの日常的な活動に関する話題についての会話の内容をまとめて、紹介することができる」、Spoken Interaction 3の「文化や環境などに関する馴染みのある話題や、大学生活、趣味などの日常的な活動に関する3分程度のプレゼンテーションを聞いて、簡単な英語を用いて内容確認の質問をしたり、感想や自分の意見を述べたりすることができる」とSpoken Interaction 4の「学習内容に関して、教師と簡単な英語でのやり取りができる」というものであった。会話に関しては、ペアやグループに分かれ、教科書に含まれている日常的な活動に関するディスカッションを定期的に行った。また、ディスカッションに教師が入ることにより教師と英語でのやり取りができるよう練習を行った。プレゼンテーションに関しては、学習者は大学入学時点で英語による口頭発表を聞いた後に英語で質疑応答をするという経験が少ないことが推察されるため、1回のスピーチと2回のプレゼンテーションの後に、聴衆が発表者に英語で質問し、発表者が答えるというアクティビティが含まれている。

Spoken Productionの重点項目は、Spoken Production 1の「文化や環境などに関する馴染みのある話題や、大学生活、趣味などの日常的な活動に関する話題から、自分の興味・関心にあわせた話題を選んで、3分程度のプレゼンテーションができる」、Spoken Production 2の「文化や環境などに関する馴染みのある話題や、大学生活、趣味などの日常的な活動に関する話題について、知っている単語や文法知識を使って話すことができる」、Spoken Production 3の「聞き手を意識して、大切な部分を強調して話すことができる」とSpoken Production 4の「聞き手にアピールできる速度、リズム、イントネーションでプレゼンテーションができる」というものであった。会話に関しては、ペアやグループに分かれ、教科書に含まれている日常的な活動に関するディスカッションを定期的に行った。また、プレゼンテーションに関しては3回行われるスピーチやプレゼンテーションを通じて段階的に指導を行った。最初のスピーチは1分程度、2回目は2分程度のプレゼンテーション、最後にパワーポイントを使用した3分程度のプレゼンテーションと徐々に話す時間を伸ばすことで、学習者は最終的に3分以上のプレゼンテーションが行えるようになり、速度、リズム、イントネーションに違いを出すことで、英語によるプレゼンテーションがどのように行われるのかということを理解することができた。これらの指導を通して、Speakingの重点的指導項目に対する学習者の自己評価が著しく改善されたことから、この指導計画は効果的であったと評価できる。しか

しながら、Listening同様、改善されたとはいえ最終授業での回答比率が20%と依然として高い項目が多いため、改善の余地があることが示された。以上から、レベル3のカリキュラムは、ListeningとSpeakingの分野で重点的に指導すべき事項が学習者に身についたかという観点から判断すると、全体的に効果的ではあったが改善の余地があると評価できる。

次に、指導計画に明記された学習到達目標はどの程度達成されたか、という点を検討する。Listeningの学習到達目標は表1に示した通り、「はっきりした標準的な話であればその大意がわかること、CD、スピーチ、プレゼンテーションの話の概要を表すキーワードやメモを取ることができること、授業中の教師の指示を理解することができること」と設定されている。この学習到達目標に向けたCAN DOリストの「できない」「全くできない」という回答比率は、Listening1に関しては、初回授業においては24%であり、最終授業の回答比率は6%であった。Listening2に関しては、初回授業においては27%であり、最終授業では4%であった。Listening3に関しては39%から14%に低下した。Listening4に関しては初回授業において8%であり、多くの学習者が高等学校までの学習によって身につけている力であることがわかる。最終授業では4%まで低下した。以上から、レベル3のListeningに関する指導計画は、学習到達目標を達成するために適したものであったと評価できる。

Spoken Interactionの学習到達目標は表1に示した通り、「大学生生活や趣味などの日常的な活動に関する話題について、2分程度の会話を続けることができること、課題において、教員や学生者に簡単な英語を用いて内容確認の質問をしたり、感想や自分の意見を述べたりすることができること」と設定されている。初回授業の「できない」「全くできない」という回答比率はSpoken Interaction1は56%、Spoken Interaction2は54%、Spoken Interaction3は70%、Spoken Interaction4は59%と全体的に高かった。レベル3ではグループワークやペアワークを多く取り入れ、学習者同士が英語でコミュニケーションをとる機会を多く設定している。その積み重ねにより、既述したように最終授業ではSpoken Interaction1は56%から21%に、Spoken Interaction2は54%から24%に、Spoken Interaction3は70%から25%に、Spoken Interaction4は59%から30%にまで低下した。しかしながら、最後まで「できない」「全くできない」という回答比率は全て20%を超えていた。これは、授業中に教科書の問題やプレゼンテーションのフィードバックなどに関するSpeaking練習を行うことはできたが、大学生生活や趣味などの日常的な活動に関する話題について話す機会が少なかったことが要因だと考えられる。今後は授業内外でさらにSpeakingを練習できる場を設ける必要がある。

Spoken Productionの学習到達目標は表1に示した通り、「自分の興味・関心にあわせた話題を選んで、知っている単語や文法知識を使って3分程度のプレゼンテーションができること、聞き手を意識して、大切な部分を強調して話すことができ、かつアピールできる速度、リズム、イントネーションでプレゼンテーションができること」と設定されている。初回授業の「できない」「全くできない」という回答比率はSpoken Production1は55%、Spoken Production2は46%、Spoken Production3は51%、Spoken Production4は49%と全体的に高かった。これも、上述したグループワークやペアワークの積み重ねと3回のプレゼンテーションを通じて、最終授業では、それぞれ15%、18%、7%、10%と著しく改善された。しかしながら、これらの回答比率は今後の改善の必要性も示唆している。これは、プレゼンテーションの回数の少なさが要因だと考えられる。既述

したように、高等学校では聴衆の前での口頭発表の機会が少ないことが推察される。そのため、レベル3の授業中に行なった1回のスピーチと2回のプレゼンテーションは、学生の苦手意識を改善できるものではあったが、「できる」「かなりできる」といったレベルにまで到達するものではなかったと考えられる。しかし、授業回数が30回と限られており、学生数が30名以上の授業でプレゼンテーション能力を著しく向上させることは困難である。そのため、授業外でSpoken Productionの能力を向上させる方策を検討する必要がある。

以上から、レベル3のSpeakingに関する指導計画は、学習到達目標を達成するために適したものであったと評価できる一方、改善の余地があることが示された。

おわりに

本稿の目的は、茨城大学総合英語プログラムのレベル別授業で活用されているCAN DOリストを、ListeningとSpeakingに焦点を当てて、高大アーティキュレーションとカリキュラム評価に活用できることを検証することであった。高大アーティキュレーションにおける活用に関しては、初回授業におけるCAN DOリストの分析結果から、プレレベル3では、Spoken Production 2、Listening 3とSpoken Interaction 3が、レベル3では、特にListening 3、Spoken Interactionの1から4とSpoken Productionの1から4が高等学校卒業段階では十分身に着いていないことが示された。

高等学校学習指導要領により、学習者が高等学校卒業時点で身に着けるべき英語力の基準を掴むことはできるが、実際に大学入学時点でこの基準がどの程度達成されているのかという点は明確に把握できない。しかし、CAN DOリストの活用により、大学初年次英語教育として重点的に指導すべき項目が明瞭になり、CAN DOリストが英語教育の高大アーティキュレーションにとって有用なツールとなることが示された。

カリキュラム評価における活用に関しては、2つの観点からカリキュラム評価を実施した。第1の観点は、現状の指導計画に基づいた指導により、学生に重点的に指導すべき事項が身についたかというものであり、第2の観点は、指導計画に明記された学習到達目標がどの程度達成されたか、というものであった。第1の観点に関しては、プレレベル3では、「できない」「全くできない」という回答比率が高かったSpoken Production 2が82%から9%に、Listening 3は64%から5%に、Spoken Interaction 3は61%から10%になり、大幅に改善されたことが示された。レベル3では、Spoken Interaction 3は70%から25%に、Spoken Interaction 4は59%から30%に、Spoken Interaction 1は56%から21%に、Spoken Interaction 2は54%から24%に、Spoken Production 3は51%から21%に大幅に改善されたことが示された。さらにプレレベル3、レベル3の指導計画を検討した結果、プレレベル3とレベル3のカリキュラムは、学習者の苦手とする項目を改善するために効果的であったことが示された。

第2の観点に関しては、ListeningとSpeakingの学習到達目標と、CAN DOリストの具体的記述と学生の自己評価の変化を照合した結果、学生の自己評価は大幅に改善され、最終的にプレレベル3とレベル3のコースの目標は高い水準で達成されたことが示された。このように、CAN DOリストは、学生の自己評価を指標として、教師が具体的にカリキュラムの有効性を評価する際に有用

なツールとなることが示された。加えて、教師が最終授業の CAN DO リストの結果を基に自身の実践を振り返ることにより、今後の指導の改善点も示唆された。具体的には、プレレベル 3 に関しては、最後まで「できない」「全くできない」という回答比率が高かった Spoken Interaction 3、Spoken Production 2 と Spoken Production 3 に関しては、次のような改善方法が考えられる。Spoken Interaction 3 に関しては、学習者による 4 回のスピーチやプレゼンテーションにおいて英語による質疑応答が行われたが、一人あたりの回数としては、授業時間の制約があり十分な機会を提供することができなかった。今後は、ブックレポートの内容などをグループで発表させ、それに基づく英語による質疑応答を取り入れるなど、学習者による英語の質疑応答の機会を増やしていくことができる。Spoken Production 2 と Spoken Production 3 にも課題が見られることから、何割かの学習者は 2 分程度の口頭発表はできてはいるものの、自信を持って行うというレベルには達していないことが推察される。スピーチ練習の機会を増やしたり、具体的に褒めたりすることが有効であると考えられる。レベル 3 に関しては、最後まで「できない」「全くできない」という回答比率が高かった Spoken Interaction 全般 と Spoken Production 3 を改善するために、英語で大学生活、趣味などの日常的な活動に関する話題を話す機会をさらに増やすことが求められる。したがって、今後は授業の最初の 5 分程度を利用し、学習者同士で大学生活、趣味などの日常的な活動に関する話題を話し合う機会を設けることで改善を図りたい。

総合英語プログラムは2017年度をもって終了したが、現在実施されているプラクティカル・イングリッシュにその基盤は引き継がれている。そのため、総合英語プログラムのプレレベル3とレベル3による学習者の英語力の向上の成果と残された課題を明確に示すことは、今後の茨城大学教養英語の改善にとって有用な資料となる。

注

- 1) 茨城大学総合英語プログラム及び使用している CAN DO リストについては『茨城大学大学教育研究開発センター英語科目専門部会 (2006) 『総合英語プログラム全学導入と新たな挑戦—茨城大学教養英語教育改革報告書—Vol.2』』を参照。

引用文献

- 荒井克弘. (1998) 「高校と大学の接続—ユニバーサル化の課題」『高等教育研究 第1集』179-196.
- 茨城大学大学教育研究開発センター英語科目専門部会. (2006) 『総合英語プログラム全学導入と新たな挑戦—茨城大学教養英語教育改革報告書—Vol.2』.
- 喜多村和之. (1999) 『現代の大学・高等教育—教育の制度と機能—』, 玉川大学出版部.
- 文部科学省. (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」『中央教育審議会』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm (2017年9月1日閲覧).
- 文部科学省. (2015) 『高等学校学習指導要領』, 東山書房.
- 野畑博之・赤堀侃司. (2002) 「学習の二重性とカリキュラム研究—コースとしてのカリキュラム再考—」
 カリキュラム研究, 11, 1-13.

- 野村幸代・藤井拓哉. (2017)「高大接続とカリキュラム評価における CAN DO リストの活用に関する研究 (I)」茨城大学人文学部紀要「人文コミュニケーション学科論集」, **22**, 83-97.
- 佐藤学. (1996) 『カリキュラムの批評—公共性の再構築へ』, 世織書房.
- 吉島茂・大橋理枝. (2004)『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』, 朝日出版社.